

ウンラン（ゴマノハグサ科）

「海の蘭」というだけあって、とってもかわいらしい花です。



こちらも大阪からは絶滅。

本当に残念・・・



ハマウド（セリ科）

ハマボウフウとおなじセリ科ですが、

ハマボウフウよりも

ずっと背が高いのです。

砂浜でも岩場の近くでも出会えます。

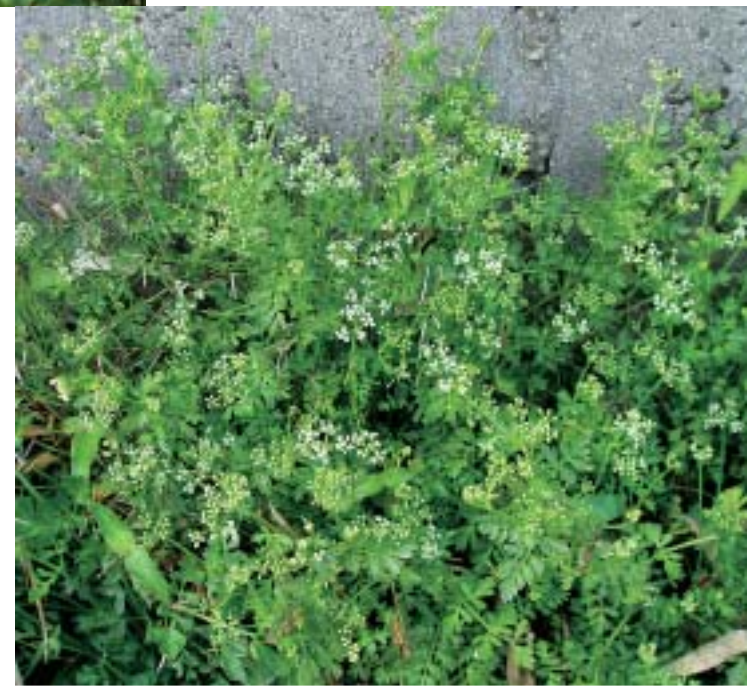
ハマゼリ（セリ科）

パセリのような

葉っぱとかわいらしい花。

海岸近くの道ばたなどで

出会えるかも？



【解説】

海岸植物と海岸環境

海岸は強風や塩分, 風によって飛ばされる砂などの影響が強く, 多くの植物にとって生育するのによい環境とは言えません. しかし, ふつうの陸上植物が生育しづらい海岸をわざわざ生育地としている植物があり, そうした植物を海岸植物と呼んでいます. 海岸植物には, 植物体が匍匐したり, 葉のクチクラ層(植物の表面を覆うロウ状物質で構成された層)が発達したりするなど, 強い風や塩分などにうまく耐えるための構造を発達させた種が多く見られます. また, 種子の散布に海流を利用するなど, 海辺であることを逆に利用して生きている種もいます. 澤田ほか(2007)は, 全国の植生調査資料から, 海岸植物を抽出してリストにし, 280種を海岸植物としましたが, このリストからは, 海岸でよく見られるものの, かなり内陸まで見られる植物(ツブブキ, ダンチクなど), 海岸でよく見られる国外外来植物(ホコガタアカザ, ノラニンジンなど)などは除外されています. この本ではそうした種類も含めて海岸植物として紹介している場合があります.



大阪湾の海浜でよく見られる外来種ノラニンジン

海岸植物の種子散布

植物の種子の散布は風に乗って運ばれたり, 動物によって運ばれたり, さまざまな方法でおこなわれます. 海岸植物には海水の流れ(海流や潮流など)を利用して種子を運ぶ散布を行う種類が多く, こうした方法を「海流散布」と呼んでいます. 最近の研究では, 海岸植物の散布体(種子・果実など)が水に浮かんでいられる長さ, 塩水に耐えられる期間などは種によって違いがあることが分かっています(澤田・津田, 2005). 長い間, 水に浮かんでいられ, 塩にも耐えることができる散布体は海流に乗って, 遠くまで運ばれ, 発芽し, 定着する可能性があります, 短い間しか水に浮かび続けられないものや塩に耐える力が弱いものは, 遠くまで運ばれて, 新たな地で発芽したり, 定着したりするのは難しいと考えられます.

海浜植物の成帯構造

自然の砂浜では, 波打ち際から内陸に向かって, オカヒジキ(一年草)~ケカモノハシ・コウボウムギ(多年草)~ハマゴウ(低木)~クロマツ(高木)といったように, 生育する植物の種類(生活形)が移り変わっていく様子が見られ, それぞれの植物が波打ち際にそって帯を並べたように広がって見えることから, 成帯構造と呼ばれています.

このように, 植物の種類が徐々に置き換わっていく理由としては, 砂浜は, 1. 波や潮風による塩害を受ける, 2. 保水力や養分に乏しい, 3. 地形が変化しやすく, 不安定な環境であり, これらの要因が波打ち際から内陸にいくほどやわらぐことが関係しています. 一口に海岸環境といっても, 砂浜海岸, 岩石海岸, 塩性湿地など, さまざまな環境がありますが, 波打ち際から内陸に向かって, こうした影響が徐々にやわらぎ,

生育している種が変化することは共通しているように思われます.

塩性湿地の植物

川や海と陸地との間には, しばしば堤防や砂丘・砂州などの微高地がありますが, その背後には, 粒の細かい粘土などの堆積物でできた湿地ができることがあります. このような湿地のことを後背湿地と呼んでいます. 河口干潟の背後にも, このような湿地ができることが多く, 河口の後背湿地では, 海水が入り出る塩性湿地となります. 塩性湿地には独特の植物が生育しており, 海岸の埋め立てや人工護岸化が進んだ大阪湾では, その多くは絶滅危惧種になっています. 塩性湿地は, 大阪湾内では, 淀川河口や男里川河口, 兵庫県の成ヶ島などにわずかに残されています.

海岸植物と絶滅危惧植物

海岸植物は, 貧栄養や乾燥, 砂の移動, 高温, 高塩分濃度といった厳しい環境に耐えられる特性をもつ植物です. 現在までに大阪府で記録のある海岸植物は50種以上ありますが, このうちの12種が消失の危機にあると考えられており, ほかに, 過去に記録があった11種が, 現在は見られなくなっています. 次のページの表に, 大阪府で記録のある海岸植物のリストを掲載しましたが, 絶滅種や過去に数回標本がとられたことがあるだけで現在は見られない種なども含まれていますので, 現在の泉南地域で見られる海岸植物は約40種となります. 大阪湾には, 自然海岸がほとんど残されておらず, 多くの砂浜や干潟が人工護岸などに変えられてしまいました. こうした生育地の直接的な破壊が, 海岸植物が消えてしまったことの原因であると考えられています.

大阪湾の海岸植物ガイド

1. 西中島~柴島(大阪市): 塩性湿地
柴島~西中島(南方)~十三にかけての淀川河口敷には, ヨシ原が広がり, ウラギク, シオクグが見られます. 大阪府最大の塩性湿地植物の観察スポットです.
2. 二色浜(貝塚市): 砂浜
人工海浜ですが, 大きな海浜植物群落があります. 最近では, 海浜植物はやや減少傾向にあり, 外来植物が増えているようです. ハマヒルガオ, コウボウムギなどが観察できます.
3. 榎井川河口(泉南市): 砂浜
面積は大きくありませんが, 比較的多くの海浜植物が見られる良好な砂浜があります. 大きなハマヒルガオ群落があり, ハマエンドウやコウボウシバなど, いろいろな種類の海浜植物が観察できます.
4. 樽井海岸(泉南市): 砂浜
マーブルビーチとサザンビーチ(海水浴場)との間にある小さな砂浜海岸です. 大型ショッピングセンターの駐車場が目の前にあるので, お手軽に観察したい人にはよいスポットです.
5. 男里川河口(泉南市~阪南市): 砂浜・塩性湿地
大阪府側では最も良好な環境が残された干潟が, この男里川河口と言われています. 決して広くはありませんが, 狭い範囲に多様な環境があることが特徴です.
6. 貝掛海岸(阪南市): 砂浜・岩石海岸
南海本線の鳥取ノ荘駅から箱作駅にかけての海岸線は, 歩きやすい散歩コースになっています. ところどころに小さな砂浜があり, 海浜植物を観察できるほか, ハマナデシコなどが見られる崖地もあります. お勧めの時期はハマダイコンが咲き乱れる4~5月でしょう.